

ドストエフスキイ研究会便り（８）

カラマーゾフの世界 — スメルジャコフを巡る人々—

（１）疾走するマリアとグレゴリー

はじめに

ライフ・ワークとして長い間取り組んできた『カラマーゾフの兄弟論』を書き終えてから三年余、その上梓から一年半が経った。しかし不覚にも(?)、これでカラマーゾフの世界と私の縁が切れたわけではなかった。目を閉じるとなおも鮮やかに心に浮かび上がる様々な場面、十分に考え切らなかった問題、新たに湧き出る謎、若い人たちから投げかけられる問い、拙著についての書評・・・この作品はなおも私の心に大きくのしかかり、その謎と魅力はますます大きくなってゆくように思われる。

そのような中で、この三年間、私は若い人たちとの対話に刺激されつつ、改めてこの作品が持つ様々な問題と取り組み、それらについて折につけデッサンを試みてきた。その一部は小さなエッセイとして一応の形を整え、既に河合文化教育研究所のホーム・ページ内に設けられた「ドストエフスキイ研究会便り（３）-（７）」として五回ほど掲載されたのであるが、なお新たなデッサンは増えつつある。

それらを読み返して改めて驚かされるのは、イワンに加えて、スメルジャコフが占める役割の大きさと重さである。若い頃から私は、この存在をカラマーゾフ世界の「ブラック・ホール」として課題とし、先のカラマーゾフ論でも正面から取り上げ、それなりの結論は出したつもりであった。だがこのブラック・ホールが他の主人公たちに投げかける影に、ますます私の眼は釘付けにされている。この存在が生きる闇に、如何なる光が射し得るのか。基本的にはこの問題の前に立たされるのだ。それと共に私の心に大きな位置を占めるようになったのは、アリョーシャは言うまでもなく、スメルジャコフを愛するマリアやグレゴリーたち、つまり彼自身が言う「親切な人々」（十一６）の存在である。これらの人物たちが放つ光にも、改めて正面から焦点を当て直す必要があるだろう。そんなわけで自分が書き溜めたものの中から、まずはスメルジャコフとマリアとグレゴリーとの関係から始め、更にはスメルジャコフと他の兄弟たちとの関係へと順次焦点を当ててゆき、その考察の経過をこの「ドストエフスキイ研究会便り」に、基本的には毎月一回ずつ、（８）から（１３）の六回の予定で掲載することになった。正確なスメルジャコフ像を刻むために、六回の中では同じエピソードも様々な角度から繰り返し取り上げ、ドストエフスキイがこのブラック・ホールたる青年に込めた意味を出来るだけ明瞭に浮き彫りにするよう努めたい。

ところで河合文化教育研究所のホーム・ページが、また「ドストエフスキイ研究会便り」が目指すところは、既成のマスコミ・ジャーナリズムやアカデミズムからは距離を置き、直接古今を貫く一級の先哲の胸を借り、自由に試行(思考)錯誤を試みる修業の場を創出することである（「研究会便り」(１) - (２)）。殊にドストエフスキイとの取り組みにおいては、

この世界の奥深くにまで沁み込んだ聖書世界と聖書的思考を誤魔化さず読み解くという課題が、この三十年間当研究会の一貫して保持してきた姿勢であった。この角度からなされる、今回のカラマーゾフ世界とスメルジャコフとの取り組みを、私の教え子たちを始め、これに触れて下さる方たちが少しでも自らの思索の手掛かり、あるいは「叩き台」として頂けるならば、私としてはこれにまさる喜びはない。

2017年12月13日

カラマーゾフの世界 — スメルジャコフを巡る人々

目次

はじめに

- 第一回目.第1章. 疾走するマリアとグレゴリー [第十一篇10より]
 第二回目.第2章. スメルジャコフの猫の葬式 [第三篇2より]
 第三回目.第3章. イワンの「人生で最も卑劣なこと」 [第五篇6より]
 第四回目.第4章. 噛み砕かれたアリョーシャの指 [第四篇3より]
 第五回目.第5章. ドミートリイの裸形の荒野 [第八篇2より]
 第六回目.第6章. スメルジャコフへの鎮魂歌 [第六篇3より]

凡例

★**目次**の各タイトル後の [] 内は、(たとえば第1章では [第十一篇10より])、それぞれの章の冒頭に取り上げる場面を指すものである。この場面を導入として各章の考察が展開するという象徴的な意味を持つものであるが、それ以上の拘束力はない。

★作品からの引用は、※アカデミア版30巻本全集(1972~1990)を用い、筆者自身が訳出した。その際、日本語訳のドストエフスキ全集として※筑摩書房版(1962~1991)、※河出書房版(1969~1971)、※新潮社版(1978~1980)を参考とさせて頂いた。その他※江川卓訳(集英社世界文学全集、1979)も参考とさせて頂いた。

★聖書からの引用は、※ネストレーアレント編、『ギリシャ語新約聖書』(27版、1993)、※ロシア聖書協会『我らが主 イエス キリスト 新約聖書』(1823)、※ロシア聖書協会「旧約聖書」(2011)、※B.H.ザハーロフ、B.Φ.モルチャーノフ編『ドストエフスキイの福音書 1850年1月トボリスクでドストエフスキイに贈与された1825年発行新約聖書の個人蔵書 [写真版]』(2010)、※佐藤研編訳『福音書共観表』(岩波書店、2005)、※田川建三訳註『新約聖書 訳と注』1~6巻(作品社、2007-2013)、※日本聖書協会『舊約新約聖書』(文

語訳、1967)等を利用させて頂いた。主に文語訳の引用としたのは、口語訳よりも文語訳の方が、聖書の磁場に満ちる精神的緊張感がより鮮明に表現され、格調も高いと考えるからである。

- ★『カラマーゾフの兄弟』の内容について言及・引用する時、例えば「第十一篇第9章」の場合は、括弧を用いて(十一9)のように示した。本論自体の内容について言及する時、例えば「第5章^[3]」の場合は、括弧を用いて(第5章^[3])のように記した。前者と後者とを一緒に記す場合には括弧内に続けて(十一9、第5章^[3])のように記した。「研究会便り」の通し番号を付す場合には、(十一9、第5章^[3]、「研究会便り(5)」)のように記す。

- ★聖書について言及・引用する時、例えば「マルコ福音書第五章第23節」の場合は、括弧を用いて(マルコ五23)のように記した。文脈上明らかな場合には、ただ(五23)と記した。

- ★参考・参考文献は、拙著『カラマーゾフの兄弟論 — 砕かれし魂の記録 —』(河合文化教育研究所、2015)の巻末に記した参考文献と基本的には同じであるため、こちらを参照されたい。それ以外に説明の必要があるものについては、その都度文中に(括弧)を用いて記した。

- ★注釈的説明については、本文中の[括弧]内に活字を小さくして記した。但し、やや長いものについては改行をし、段落を下げ、活字も小さくして記した。

- ★ロシア語の重要語・概念については、例えば「絶滅させる」^{イストレブリャーチ}「宗教的痴愚」^{ユローヂヴァヤ}というように、適時カタカナでルビを付した。聖書のギリシャ語についても同じで、例えば「力」^{デュナミス}のようにカタカナでルビを付してある。

- ★「ドストエフスキイ」の表記は、「ドストエフスキー」や「ドストエーフスキイ」等、ロシア語の発音表記の捉え方により様々なものがあり得る。本論は「ドストエフスキイ」と記す。

- ★「はじめに」でも記したように、本論は六回にわたり様々な角度から主にスメルジャコフについて考察するため、同じエピソードやテーマを繰り返し扱っている。その都度既に扱った箇所を括弧内に記すことで、読者の考察の参考としたが、余りにも明解な場面や、くどいと思われるところは適時判断して、言及していない場合もある。

- ★この物語の「筆者」あるいは「語り手」は、登場人物たちのことを親しく知る独自の立場にあるが、本論の筆者(芦川)は、彼が作者ドストエフスキイの立場をほぼそのまま代弁すると考える。それゆえ本論中で「筆者」「語り手」、また「作者」「ドストエフスキイ」とある時、これらは基本的に同一であると考えて頂いて差し支えない。

第1章 疾走するマリアとグレゴリー [第十一篇 10より]

目次	[ページ]
スメルジャコフの自殺	4
1. ^{デート} 逢瀬まで	4-6
2. 逢瀬以降	7-9
3. 逢瀬の場で	9-14
4. スメルジャコフと聖書(1)―「初子」への祝福―	14-18
5. スメルジャコフと聖書(2)―イエスへの呪詛―	18-22

スメルジャコフの自殺

真夜中の家畜追込町をマリアが必死で走り抜けてゆく(十一 10)。マリア・コンラードチエヴナ。彼女はイワンが三度目で最後のスメルジャコフ訪問を終えて去った後(十一 8)、サモワールを片付けようとして部屋に入り、「壁の釘にぶら下がった」婚約者スメルジャコフを発見するや、警察にも「誰にも知らせず」、このことを「真つ先に」アリョーシャに知らせるべく、夜の闇の中を「ずっと走り通しで」、彼の許に駆けつけようとしているのだ。

読者の心に鮮烈に刻まれる真夜中のマリアの疾走。彼女のこの姿に目を向けることから、『カラマーゾフの兄弟』のブラック・ホールとも言うべきスメルジャコフを理解する上で、またその異母兄弟たち三人、ドミートリイとイワンとアリョーシャについて考える上で、更にはこの作品の中心テーマを捉える上で、一つの突破口が開かれるように思われる。この作品の特徴である複雑なドラマ展開のため、いきおい本論の叙述も話が前後し、繰り返しも多くなるが、まずは最初にマリアに関する情報を集めてみよう。そこから明らかになるのは、彼女のスメルジャコフに対するひた向きの愛情であり、殊に二人の^{デート}逢瀬に焦点を絞り込むことで、「己の命を絶滅させる」(彼の遺書)に至ったスメルジャコフ、この作品のブラック・ホールたる存在の内面も相当鮮明に浮き彫りになってくるように思われる。

1. ^{デート}逢瀬まで

マリアの帰郷

マリアとその母はカラマーゾフ家の隣家の住人である。「相当老朽化してはいたが、外観は心地よい」(三1)とされるカラマーゾフ家の屋敷と較べると、母娘の住まいは「古びて小さな傾きかけた家」であったとされる。筆者が伝えるラキーチンの情報によれば(三3)、マリアは首都ペテルスブルクで高官の家々を小間使いとして転々としていたのだが、一年ほど前、足が不自由で年老いた母が病気になったのを機に、故郷の家畜追込町に戻ったのである。この作品冒頭の第一篇と第二篇では、主人公たちが次々とそれぞれの目的を持って

故郷の家畜追込町に帰って来る。筆者はそれらの帰郷について丁寧に筆を重ねた上で、「場違いな会合」と題される一つのクライマックスを現出させるのであるが(第二篇)、そして我々はこれから何度もこの会合について言及するのだが、大きくはこの流れの中にマリアの帰郷も位置づけられるであろう。

ところで一年ほど前、彼女が帰郷した頃には、イエスの呼び声に応え出家の覚悟を決めたアリョーシャもまた、モスクワの養育者の許を去り、同じ家畜追込町に戻ったとされる。彼の帰郷の直接の理由は、亡き母の墓を探し出すことであったとされる(一4)。ほぼ同時期の帰郷と、その直接の動機が共に母であったという事実。二人の心根について理解するために、これは筆者から提供されたささやかではあるが貴重な伏線的情報として、後の「親切な人々」の考察、更には「実行的な愛」についての考察の手掛かりの一つとしよう。

マリアの帰郷について、また一年前に新たに始まった母娘二人の生活について、具体的な詳細が記されることは殆どない。だが恐らくは母の病のためであろう、筆者は母娘の生活は逼迫し、今ではその日の食べ物にさえ事欠く有り様となっていたと記す(三1)。屋敷内にある庭の空き地からは牧草が採れたが、その土地の賃貸料とても年に数ルーブリにしかならなかった。最近庭には菜園も作られたが、マリアは日々隣家のカラマーゾフ家を訪れては、下男グレゴリーイの妻マルファからパンやスープを分けて貰うようになっていた。これに対しマルファは嫌な顔ひとつ見せず、求めに応じてやるのだった。更に筆者によれば、このような極貧生活に陥りながらも、マリアは都会風の派手な身なりにこだわり続け、所有するドレスは一枚も手放そうとせず、その内の一つはやけに長い裳裾のついた青いドレスであったという。その派手な衣装の一つに身を包み、マリアは日々そっとマルファの許に現れていたのであろう。

スープとスメルジャコフ

このマリアがいつの間にか、隣家カラマーゾフ家の下男スメルジャコフと恋仲になったのである。彼はフォードルの私生児とされる青年で、マルファの夫グレゴリーイと共にカラマーゾフ家の下男として、殊に料理番を務めていた。あるいはそこにはスープが取り持つ縁もあったのかも知れない。スメルジャコフについて理解するためにも、彼のスープに関するエピソードから入ってゆこう。彼の出生については後に繰り返し確認することになるが、成長するに従って、スメルジャコフは極度の潔癖さを示し始める。つまり彼はスープを前にして、匙でその中を窺ったり、屈んで覗き込んだり、更には匙ですくっては光にかざしたりするようになったのである。この行動はスープに限らず、口に運ぶもの全てに及ぶようになり、遂に彼はあらゆる食べ物の一片をフォークで刺し、顕微鏡を覗き込むかのようにじっと見つめ、長い躊躇の末にようやく覚悟を決めてそれを呑み込むまでになっていたのだ。

育ての親のグレゴリーイとマルファからの報告を受けたフォードルは、直ちにスメルジャコフをモスクワへと送り出す。病院に送ったのではない。彼を料理人にするためである。

筆者によれば、この青年は大都会に一向関心を示すことがなく、わずか一回だけ訪れた劇場でも、そこで示したのは不満だけであったという。数年後に帰郷したスメルジャコフの相貌は大きく変わっていた。顔の皺が増え、顔色は黄ばみ、すっかり老け込んで、去勢された男ようになっていたのだ。だが筆者によれば、この外貌の変化にもかかわらず、スメルジャコフの内面はモスクワに出かける前も後も変わることはなかった。相変わらずこの青年は人嫌いであり続け、誰とも付き合おうとはせず、頑なに沈黙を守り通したのだ。

だが彼は一点、モスクワ風のお洒落には強い興味を示したのであった。帰郷後の彼は、小ぎれいなフロックとシャツを身につけ、衣服には毎日二回念入りにブラシをかけ、仔牛の^{なめしがわ}短靴も、イギリス製の靴墨で鏡のようにピカピカに光るまで磨き上げるのであった。彼は料理人としての腕には磨きをかけて帰ったのだが、フォードルから支払われる給料のほとんど全額は、今や衣類やポマードや香水などに使われるようになっていた。ところが人嫌いということでは、彼は男性と同じく女性をも軽蔑しているようであり、殊に女性たちには厳格な距離を保ち続けていたのである。

スメルジャコフの癲癇発作についても記しておこう。詳しくは次章で見ると、彼の癲癇発作は既にモスクワ行きの前から始まっていて、モスクワから帰った後にはますます頻繁になったのである。そのような時、彼に代って料理を作るのはマルファであったが、家長のフォードルの口には合わなかった。そんなフォードルがスメルジャコフの癲癇の病に関して、またも如何にも彼らしい角度から診断を下したのである。「嫁でも貰ったらどうだ。世話をしようか？」(三六)。青ざめたスメルジャコフは、一言も答えなかったという。

これらのエピソードは皆、スメルジャコフの内面に分け入る強力な手掛かりを与えてくれるように思われる。殊に彼が口に入れるもの全てを光にかざし、じっと調べるようになったという事実を無視して通り過ぎることは許されないであろう。またますます頻繁になってゆく癲癇発作について、更にはその極度の人嫌いと女嫌いについても、専らこれらを思春期の問題と診断したフォードルとはまた別の角度から、我々は我々で様々な考察を試みる誘惑に駆られるのである。

更にはスープを匙ですくっては光にかざし、じっと覗くスメルジャコフ。この青年の育ての親であるマルファの許を訪れ、毎日パンとスープを分けて貰うマリア。人間嫌いで女嫌いのはずのスメルジャコフと、マリアとの交流の開始。大都会モスクワの雰囲気それぞれに纏った二人が、庭の片隅で重ねる^{デート}逢瀬——これらのデータもまた、我々の内に少なからぬ好奇心を呼び起こし、様々な空想を掻き立てずにはいないものである。

だがこれら二人の、殊にスメルジャコフについての情報は未だ十分に集まってはいない。我々はドストエフスキイの筆に乗って、徒に空想や妄想の世界に踏み込むことを避けねばならない。スメルジャコフについての情報は、本章の後半部と次回の第2章で更に集め、その上で彼の内面についての考察を試みることにしよう。今は専ら彼とマリアとの^{デート}逢瀬の場面に光を当て、図らずもそこで表出される彼の内面の「闇」に焦点を絞らねばならない。その闇は、偶然その場に居合わせたアリョーシャの心に受け止められ、またそこからは、

この作品の最深奥を流れる暗い通奏低音が浮かび上がるであろう。

2.逢瀬以降

カラマーゾフ家と隣接する庭外れの茂みの中には崩れかかった古い四阿があり、その近くにある塀の脇の木々の間には、これも古く背の低い緑色のベンチがあった。いつの間にか二人はここで逢瀬を楽しむようになっていたのである(五2)。アリョーシャによって偶然目撃される二人の逢瀬。ここでスメルジャコフが MARIA に語る言葉が、上に記したように、この作品の深奥くに潜む闇を浮き彫りにする決定的な言葉と思われる。だがこれは本章の後半(3・4・5)で取り上げることにしよう。我々はまずこの逢瀬の翌日から、スメルジャコフによる父親殺害、そして二か月後の彼の自殺に至るまでの経緯を、主にスメルジャコフとイワンとの関係を中心にして、簡単に辿っておくことにしよう。殊に二人の三度にわたる対決は『カラマーゾフの兄弟』後半のクライマックスであり、これからも何度か検討するのだが(殊に第3章4、第6章4)、ここでは MARIA に沿う形で、取りあえず全体を一瞥しておこう。

二人の逢瀬の翌日の夜のことだ。隣家の主フォードルが脳天を叩き割られる。癲癇発作の偽装の下に、スメルジャコフがフォードル殺害を決行したのである。彼の「共犯者」イワンは、犯行を前にして既にモスクワへと逃げ去っていた。スメルジャコフの周到な準備により、父親殺しの犯人として逮捕されるのは長兄のドミートリイである。この殺害の事情や詳細については第3章以降で確認しよう。ちなみにこの時 MARIA はグレゴリーに依頼され、フォードル殺害の報を警察署長にもたすべく、夜の町に駆け出している。スメルジャコフが脳天を叩き割ったフォードル。そして二か月後、壁に首を吊った当のスメルジャコフ。 MARIA とは恐るべき死の報知を持って二度も家畜追込町の夜の闇を走り抜けるという、悲しい伝令としての運命を担わされた女性である。

さてスメルジャコフが偽装した癲癇発作は、父親殺害の衝撃から、直ちに激しい真正の発作に移行する(九2、十一8)。病院に運び込まれたものの予後が悪く、衰弱した彼の死を予想する医師もいた。だが彼は、ほぼ半月ほどが経ってから、 MARIA の「婚約者」として彼女の許に引き取られる。彼女はその母親と共に、以前住んでいたカラマーゾフ家の隣から、別の住まいに移っていたのである(十一8)。カラマーゾフ家の隣にあった以前の家は「古びて小さな傾きかけた家」とされるのに対し、この新しい住まいは「玄関の間で二つ住まい仕切られた、傾きかけた丸太造りの小さな家」とされる。二つの家は共に「傾きかけた」「小さな家」とされるものの、赤貧の母娘が何故また何時如何にして、以前の住まいを売り払って新たな住まいに引っ越したのか、またそれが極めて短期間の内に如何にして可能となったのか、これらの具体的な事情は一切不明である。また母娘二人は共に、スメルジャコフを「非常に尊敬し」、「自分たちよりも偉い人」だと思っていたとされる(十一7)。

たとえそうだとすると、またこの「婚約」が形だけのものであったとしても、果たしてそれが何時如何なる事情の下になされたのか、これもまた不明である。

引っ越しにしても、婚約にしても、またスメルジャコフの引き取りにしても、事はいささか不可解で急な展開と言うしかないのだが、この経緯について筆者は具体的には何も記さない。全ては愛する人の危機を前にしたマリアの愛情のなせることなのか。去勢派教徒のような相貌となってモスクワから帰ったスメルジャコフから判断して、またその他の手掛かりを基に、彼とマリア母娘との三人が、何らかの^{セクト}教団に所属していたと考えるべきなのか（この去勢派教徒・スメルジャコフ説については、最終回第6章で考察しよう）。あるいはそこにはアリョーシャの密かな支援があったのか。つまりこの後で見るように、偶然恋人たちの逢瀬に居合わせてしまったアリョーシャが、二人のために様々な配慮をした結果であるのか。我々は最後の可能性が高いと考えるのだが、テキスト自体の直接的な証言は見当たらない。この問題については第2章以降の考察、殊に第4章におけるアリョーシャの「実行的な愛」についての考察を踏まえ、第6章で改めて考えることにしよう。

さてマリアの庇護の下にあるスメルジャコフのその後の動静であるが、筆者は彼の最終的な自死に至るまで、時に極めてそっけなく暗示的に、また時に極めて詳細に、我々読者に情報を与え続ける。これらについても次章以降随時検討してゆかねばならない。そこにあるのは異母兄弟イワンと出会ったスメルジャコフの、自死に至る壮絶で悲劇的なドラマであるが、今ここで一つだけ確認しておくべきは、マリアとの逢瀬の翌日に父親殺しを執行してから、彼女の許での自死に至るまでの全過程を通じてスメルジャコフには、全身全霊で彼を介護し続けるマリアが存在するという事実である(十一6以下)。また次に見るように、イワンがスメルジャコフを病院に訪問した時、この病人は自分を毎日「親切な人々」が訪れてくれるとも語っている(十一6)。マリアを始めとしてスメルジャコフに心を寄り添わせる「親切な人々」の存在。当のスメルジャコフが漏らしたこの情報は、いくら注意してもし過ぎることはないものとして心に留めておこう。

イワンのスメルジャコフ訪問

スメルジャコフの入院中から死に至るまで、彼の許を三度にわたり訪れ、熾烈な対決を繰り広げるのが異母兄弟のイワンである(十一6・7・8、第3章^[4]、第6章^[4])。この訪問こそ『カラマーゾフの兄弟』後半のクライマックスであり、それらを描くドストエフスキイの筆は圧巻と言う他ない。今回は飽く迄もマリアとの関係に限定して、幾つかの事実に注目しておこう。

上に見た病院への初めての訪問から二週間ほどが経ち、イワンがマリア母娘宅に引き取られたスメルジャコフの許を訪れた時のことである(十一7)。マリアの「婚約者」スメルジャコフは、彼女の下ですっかり健康を回復し、気力も充実し、恐らくその生命力の最後の絶頂期とも言うべき時期にあった。彼の部屋はタイル張りの暖炉によってひどく熱され、また壁にはきれいな青い壁紙が張られていたのだが、それらは至る所が破れ、その裂け目

を恐ろしい数のゴキブリが這い回っているのだった。イワンを驚かせたこの^{おぞ}ましい光景も、新しく張られた壁紙の色はマリア好みの青であり、熱すぎる暖房も「婚約者」の健康を気遣うマリアの計らいだと取れば、決してただ^{おぞ}ましい光景とは言えないであろう。

それから一か月ほど後のことである。冒頭で言及したように、イワンが三度目で最後のスメルジャコフ訪問をする(十一8)。この一か月の間にスメルジャコフには決定的な変化が起こっていた。顔はやつれ果てて黄ばみ、目は落ち窪み、下の脛は青ずんでいた。死相とも言うべき相貌が現われていたのである。最終的な発狂を予想する医者もいた。訪れたイワンに対してマリアは、既にスメルジャコフの健康が危機的な段階に差し掛かっていること、そればかりか精神も「ほとんど正気ではない」状態にあり、部屋で「この上なく静かに」していることを告げ、哀願する。「あまり長くお話にならないで下さい」。マリアが「壁の釘にぶら下がった」スメルジャコフを発見するのは、イワンが帰った直後のことである(十一10)。

三度にわたるイワンの訪問。その間、スメルジャコフの内には一体何が起こっていたのか。殊にイワンの二度目の訪問と三度目の訪問の間に起こったスメルジャコフの変貌とは何を意味するのか。これについて筆者は直接何も記さず、その筆は雄勁かつ的確でありつつも、飽くまでも深く暗示的である。これは『カラマーゾフの兄弟』が秘める最大の謎・空白の一つであり、我々読者が様々な角度からアプローチを試みることを要求されていると考えるべきであろう。これについては第3章や第6章で正面から扱う予定であるが、今ここで我々が確認すべきは、このイワンの訪問と並行して進展するスメルジャコフの変貌という事実、そして死に至るドラマの全行程を通じて、彼の傍らには常に彼のことを気遣うマリアの存在があるという事実である。

以上のことを概観した上で、一時措いておいた場面、マリアとスメルジャコフとの逢瀬の場面に戻ろう。アリョーシャが偶然立ち聞きしてしまうこの二人の逢瀬こそ、ユーモアと微笑ましき、そして些かのグロテスクさも混在する外見の下に、スメルジャコフの最深奥に隠された闇が浮き彫りにされ、彼とマリアとの関係、そしてアリョーシャとの関係が新たに生まれ出る場であり、『カラマーゾフの兄弟』の中核的な問題が提示される場だと言えよう。

3. ^{逢瀬}の場で

緑色のベンチでの逢瀬

マリアとスメルジャコフ。二人の逢瀬の場面に焦点を絞ろう。

スメルジャコフの死から二か月ほど前、夏の終わりの頃である。先に確認したように、既に家畜追込町には主人公たち全員が揃い、それぞれの内に蓄えられたエネルギーは最高潮

に達しようとしていた。家長フォードルと長男ドミートリイとの諍い、金と女を巡る骨肉相食む争いの仲介を求めて、町の郊外にある修道院のゾシマ長老の許には、下男であるスメルジャコフを除き、カラマーゾフ家の全員が集結する。この「場違いな会合」(第二篇のタイトル)が開かれた翌日の夜には、ゾシマ長老がこの世を去り、その翌日の夜にはフォードルが殺害される。『カラマーゾフの兄弟』前半のクライマックス、相次ぐ二人の死である。

「場違いな会合」で師ゾシマが予見した悲劇。イワンの言う「二匹の蛇の食い合い」(三九)の悲劇を未然に防ぐべく、翌日アリョーシャはドミートリイを一刻も早く見つけ出そうと、前日兄と出会った隣家の四阿に忍び込む(五二)。すると近くの塀の脇、木々の間にある古い緑色のベンチの方から突然ギターを爪弾く音が響き、それに合わせて男の甘ったるい唄声が聞こえてくる。裏声で俗謡を唄うスメルジャコフの声だ。相手はマリアらしい。

「抗い難き力もて
 魅かれゆく、我は、愛しき人に
 主よ、憐れみ給え
 かの人と、我を！
 かの人と、我を！
 かの人と、我を！」(五二)

続いてアリョーシャの耳に響いてきたのは、やはりマリアの声であった。「どうして、あなたは私の方に長いこと、おいでにならないの。パーヴェル・フォードロヴィチ。どうして、あなたはいつも私たちのこと、軽蔑なさるの?。「そんなことはありませんです」。筆者は、女の方には「媚びる」ような調子が、男の方には「礼儀正しさ」の中にも「堅忍不拔な威厳」が漂っていたと記す。この会話だけからも、スメルジャコフがマリア母娘の住まいを少なからず訪問し、三人の間に交流があったことが覗かれる。そればかりでない。ドストエフスキイのユーモア漂うリアリズムの筆によって我々は、二人が交わすこちなくも甘い会話について、またスメルジャコフがマリアに聴かせる怪しげなギターの弾き唄いと、その俗謡の思わせぶりの歌詞について、つつい深追いに誘われてしまいそうになる。事実ここに引用した歌詞は、これに続く他の歌詞共々、死の彼方に去ったスメルジャコフを向こうに置く時、ただの俗謡の歌詞であることを止め、薄幸な二人の恋人への憐みを誘う奥行きを以って響き始めもするのだ。だが我々はこの深入りは避け、恋する二人を四阿から伺うことを余儀なくされたアリョーシャに注意を移さねばならない。

アリョーシャの観察によれば、「まだ若く器量も満更ではないものの、ひどく丸顔でそばかすだらけ」のマリアはこの時、なんと庭の端にある茂みの中で、例の長い裳裾のついた一張羅の青いドレスを身に纏っているのだった。一方スメルジャコフはと言えば、^{こて}鑊で縮らせたと見える髪をポマードで塗り固め、茂みの中でエナメル^{エナメル}の牛革の短靴まで履いている。アリョーシャが目撃したのは逢瀬に陶然とするマリア、つまりスメルジャコフに首つ

たけのマリアであり、またこのマリアに対し素っ気ない素振りを示しはするものの、決して満更でもないスメルジャコフの姿だったのである。

庭の奥の茂みに残る古い緑色のベンチ。そこで繰り広げられるモスクワ帰りの若い男女の、一張羅を身に纏っての逢瀬。この時アリョーシャが何を感じていたのか、筆者は記さない。だが最大限に注意すべきは、ギターの伴奏がつけられた小唄の合間、二人の間で交わされた会話の一部である。甘ったれてしなだれかかるマリアを相手に、素っ気ない態度の中からスメルジャコフがふと口にしたこと、それは彼自身の心の最深奥ばかりか、『カラマーゾフの兄弟』全篇の底に潜む闇を抉り出す恐るべき言葉である。

スメルジャコフの闇

まずその言葉が発されるまでの会話の流れを、マリアとスメルジャコフとの純朴な愛情について理解するためにも、もう少し確認しておこう。

スメルジャコフの小唄の一節が持つ響きについて、マリアは感に堪えないという面持ちで語り始める。あなたが前に唄ってくれた時の方がもっと「優しい響き」がした。自分は詩が「大好き」なのだ。このマリアの言葉を、スメルジャコフは冷たく突き放す。韻を踏む詩など「実用的ではありません」。マリアの声はますます甘えたものとなり、スメルジャコフの頭の良さや知識の豊かさが誉めそやされる。くすぐられた虚栄心に後押しをされたこともあるのだろう、スメルジャコフの内から突如噴き出してきたのは、驚くべき激しい言葉であった。

「もし幼い頃から、私の運命がこんなものでなかったなら、私はもっと色々なことが出来たでしょうし、もっと色々なことも知ったでしょうに。もし私がスメルジャシチャヤ[臭い女]から生まれた父なし子だから、卑劣漢だなどと言う奴がいるならば、私は決闘の場へ出て、そいつをピストルで撃ち殺してやるでしょう。モスクワでさえ、面と向かってそんなことを言う奴らがいました。グレゴリー・ワシーリエヴィチのせいで、ここから噂が伝わったのです。グレゴリー・ワシーリエヴィチは、私が出生に対して叛旗を翻していると叱るのです。《お前は、母の胎を開いたのだ》と言って。この世にまるっきり生まれて来ないで済むのだったら、私はまだ胎内にいるうちに自殺してしまいたかったです」(五二)

自らの出自と運命に対する激しい呪詛。続いてスメルジャコフが表明するのはロシア農民とロシアに対する強い嫌悪と軽蔑、またロシア人に劣らず外国人に対する軽蔑の念、そして異母兄弟イワンとドミートリイに対する激しい反感である。これらについてはすぐ後で見よう。

スメルジャコフとはカラマーゾフ家の家長フョードルが、裸同然の姿で街をさ迷い歩く知恵遅れの乞食女、^{ユローヂヴァヤ}宗教的痴愚のスメルジャシチャヤに生ませた私生児とされる。この世

に生まれ落ちたその夜から、彼はカラマーゾフ家の下男グレゴリーとマルファ夫婦に引き取られ、成長すると料理番の下男として父の下に仕え、一人片隅で世に対する強い嫌悪と軽蔑と復讐の心を育ててきたのである。この存在について、その内面を伺わせるべく作者ドストエフスキイが読者に示す最短の、しかも最大の符牒とも言うべきものは、彼の名前であろう。パーヴェル・フォードロヴィチ・スメルジャコフ —— 洗礼名パーヴェルは、グレゴリーが新約聖書の聖パウロから採って与えたものである。父称のフォードロヴィチは、父と目されるフォードルに因んで誰が言うともなくこう呼ばれるようになったものだが、フォードルは自分が父親であることは否定しつつも、この名称自体は面白がっていたという。苗字のスメルジャコフ [臭い男]。これは他ならぬフォードル自身が、母の綽名のスメルジャシチャヤ [臭い女] からこう名付けてやったとされる(三2)。既に名前そのものに、この青年が背負わされた運命が強く刻印されてしまっているのだ。このような名を与えられた人間が、如何に自らの存在の^{かけがえのなさ}独自性と誇りを見出し、如何にこの世に生き、如何に人に対し得るといえるのか。イワンが彼の内に見出すのは「落ち着きのなさ」と「執拗な不安」であり、更には「測り知れぬ自尊心」、しかも「傷ついた自尊心」である(第2章6、第3章3、第6章5)。この問題について、我々は最後まで目を逸らすことはならない。

「自然界の混乱」

さて後の考察の土台とするためにも、ここで彼に洗礼名パーヴェルを与えた育ての親、グレゴリーについて検討をしておく必要があるだろう。

二十年あまり前のことだ。グレゴリー夫妻に赤ん坊が授けられる。だがそれは先天性の障害(六本の指)を持つ子であった。イスラエルを罵り、ダビデとその家臣団に滅ぼされた(六本指の)ペリシテの巨人を思わせる赤子の誕生である(歴代誌・上、二十 4-8)。この子が生まれてから三日間、ひとり押し黙って裏庭の菜園を耕していたグレゴリーは、洗礼授与の日が来ると司祭に対し、この赤ん坊に洗礼を与えることを拒否する。「^{ドラゴン}竜ですのぞ」。『自然界の混乱が起こったので・・・』。赤ん坊は二週間後に世を去る。この子を小さな棺に入れてやったグレゴリーは、深い悲しみの内にその死に顔を見つめ、墓穴に土がか^{ひざまず}けられるや墓前に^{ひざまず}跪き、地面に額をつけるようにして祈っていたという(三2)。

その真夜中のことだ。乞食女スメルジャシチャヤがフォードル邸の高塀を乗り越え、湯殿で赤ん坊を産み落として死ぬという大醜聞が生じる。ところがグレゴリーはこの子を抱き上げ、住いに連れて来ると妻を座らせ、膝の上に載せた赤ん坊を胸に押しつけるようにしてこう語ったという。

「^{みなしご}孤児というものは神さまの子だ。誰にとっても身内だ。俺たちにとってはなおさらのことだ。これは俺たちの死んだ赤ん坊が送ってくれたのだ。これは悪魔の息子と信心深い女とから生まれたのだ。育ててやるんだ。これからは泣くな」

(三2)

「これは悪魔の息子と信心深い女とから生まれたのだ」。グレゴリーは、この世での名さえ与えられることなく薄幸な生を終えた自らの子に代って、新たに神と自分たちの死んだ赤ん坊から送られたこの子に、聖パウロから採ったパーヴェルという洗礼名を与えたのである。新約聖書の使徒行伝とパウロ書簡から浮かび上がるパウロ像との対比による、この名前が持つ象徴性の考察については、本論でスメルジャコフの検討が終わった後に残される課題としておこう。

「罪なくして涙する幼な子」

さて次章第2章以降で見ると、カラマーゾフ家の兄弟四人の中で、この地上世界を支配する不条理、「罪なくして涙する幼な子」の受難という現実を目を釘付けにされ、地上世界における神の存在を否定し、更には神と「キリストの愛」を天上に追放するのはイワンである。だが「罪なくして涙する幼な子」の運命を生きるべくこの地上に投げ出されたのは、そのイワンの足元にいる異母兄弟、カラマーゾフ家の下男として生きるスメルジャコフその人に他ならない。スメルジャコフばかりか当のイワン自身も、更にはアリョーシャやドミートリイもまた、ごく幼い内にそれぞれの母親に先立たれ、父親フォードルからは「忘れられ、棄て去られた」という点で、彼らは皆それぞれに悲劇的運命を定められた「幼な子」たちなのだ。『カラマーゾフの兄弟』とは、これら「罪なくして涙する幼な子」たる四人の兄弟が、それぞれの悲劇的逆境の中から如何に人間と世界とその歴史を捉え、如何にそれらと向き合うに至るか、更に言えば、この地上で如何に真の母と父を見出し、生命の真の根源たる神を見出してゆくかの試行錯誤の実験報告書とも言い得るであろう。

かくしてアリョーシャを傍らに、緑色のベンチでマリアに向かって語り出されたスメルジャコフの言葉とは、カラマーゾフの兄弟四人が担わされた悲劇的運命を否定的に象徴し表現するばかりでなく、この悲劇的存在の最たるスメルジャコフが、自らの運命に対して抱くに至った「否」、呪詛と悪魔的叛逆の心を表わす言葉として、この作品の最深奥に潜む闇、読者の胸に突きつけられた刃と言うべきものであろう。

更なる呪詛とマリア

さてスメルジャコフの言葉は、先に見たように、続いて自らの祖国ロシアとロシア農民、そして外国人に対する軽蔑と呪いとに進み、更には異母兄弟であり若旦那であるイワンとドミートリイへの痛烈な批判と弾劾にまで及ぶ。スメルジャコフは、イワンが自分のことを「悪臭漂う下男」であり、今にも「謀反」を起こしかねない奴だと語ったとして指弾する。他方、品行も、頭の程度も、懐の中身も、どこの下男にも劣らず空っぽであるくせに、皆から尊敬されるとして血祭りに上げられるのはドミートリイである。

自らの運命に対して、育ての親グレゴリーに対して、ロシアに対して、外国人に対して、そして若旦那たる二人の兄弟に対して、つまりは地上の一切に対して投げつけられる

痛烈な弾効と呪いの言葉。だがマリアはこれらを決して正面から受け止めることはない。彼女にはこれら痛烈な弾効と呪いの言葉全てが、愛する男性の甘美な囁きとしてしか響かないかのようであり、正に「柳に風」の風情で受け流し、陶然と彼の傍らに寄り添い続ける。スメルジャコフはスメルジャコフで、これに対して決して不満そうな気配は示さず、再びギターを爪弾きながら唄い出すのであった。

4. スメルジャコフと聖書(1) — 「初子」への祝福 —

神の「初子」、歪められた聖書

二人の逢瀬の追跡はこのくらいとしておこう。我々はここで先に引用した、マリアに向けて語られたスメルジャコフの言葉、その最後の部分に存在する聖書的磁場の言葉二つについて、改めて検討しておかなければならない。イワンから「悪臭漂う下男」と呼ばれるスメルジャコフが、実は若旦那イワンに劣らず如何に深い聖書知識を持ち、またその聖書的磁場の内で、如何に屈折した複雑な思索をする人物であるかが明らかとなるであろう。

まずは次の部分である。

「グレゴリーイ・ワシーリエヴィチは、私が出生に対して叛旗を翻していると叱るのです。《お前は、母の胎を開いたのだ》と言って」(五2)

スメルジャコフが、イワンにとって「謀叛」を起こしかねない奴、グレゴリーイにとっても「叛旗を翻す」人物として映っていることに注意すべきであろう。スメルジャコフに身近で触れる人物は、「謀叛」とか「叛旗」という言葉で言い表さざるを得ないような、何か只ならぬ不吉な蠢きをその内に感じざるを得ないのだ。

このこととの関連で更に注意すべきは、「母の胎を開いた」という表現である。スメルジャコフがルカ福音書から採ったこの表現とは、本来福音書のどのような文脈にあるものなのか——ルカ福音書は、ヨセフとマリア夫婦が、毎年過越祭に息子のイエスを連れてエルサレムに上るのを常としていたと記し、イエス十二歳の時のエピソードを報告する(ルカ二 41-52)。詳細は省くが、その背景としてあるのは、ユダヤ民族がモーゼに率いられてエジプトを脱出した時以来(この祝いが過越祭である)、ユダヤ人夫婦に与えられた「初子」たる男子は神に捧げられるべきものとされ、エルサレムの神殿詣でが定められていたという事実である(出エジプト記十三 2, 12, 15 等)。この事情をルカは次のように記す。

「主の律法に次のように書いてある通りである、《母の胎を開くすべての男の子は、主にとって聖なる者と呼ばれるであろう》」(ルカ二 23)

このルカ福音書を、そしてこれを用いたグレゴリーイの言葉を、スメルジャコフは大きく歪めてマリアに語っているのだ。上で確認したように、ルカの文脈において「母の胎を開く」とは、やがて成長して神に捧げられる「聖なる者」たるべき、ユダヤの長子誕生を寿ぐ示す表現、つまり本来は神からの祝福を表現するものである。また先にも見たように、そしてこれからも繰り返し見てゆくように、グレゴリーイとその妻マルファのスメルジャコフに対する姿勢は、その誕生時以来一貫して深い愛情に満ちたものである。つまり夫婦はこの子を、神と亡くなった彼らの息子から送られた「初子」として大切にしこそすれ、彼に対する悪意や敵意を示すことなどは、決してなかったのだ。そしてこのことはスメルジャコフ自身も十分に知っていたのである。病院を訪ねたイワンが必要なものはないかと尋ねると、彼は言う。「マルファ・イグナーチエプナが私を忘れずにいてくれて、必要なものが何かあれば、今まで通り親切に色々と助けてくれます」(十一6)。また育ての親について、再度彼はイワンに語るであろう。「あの人たちは、私が正に生まれ落ちてから常に優しくしてくれたのです」(十一8)。マルファと共に自分を育ててくれたグレゴリーイが示す粗暴さと不器用さと無教養の内に、スメルジャコフが自分に向けられた愛を感じ取っていなかったと誰が言えよう。

このグレゴリーイが「お前は、母の胎を開いたのだ」というルカの聖句を挙げて、スメルジャコフが「出生に対して叛旗を翻していると叱る」ことがあったとするならば、それはいつの間にかスメルジャコフの内に生まれつつある悪魔の心、自らの運命に対する呪詛と叛逆の心に気づいたグレゴリーイの内から湧き出た、怒りと絶望と悲しみに満ちた不器用で粗暴な愛の叱責でこそあれ、決して単なる軽蔑や嫌悪からなされた叱責などではなかったと考えるべきであろう。スメルジャコフの意図的な話の歪曲である。

更にスメルジャコフはマリアに対して、モスクワでの料理修行中、自分のことを「スメルジャシチャヤ[臭い女]から生まれた父なし子だから、卑劣漢だなどと言う奴」がいたと語り、それはグレゴリーイのせいだとも言う。だがこれもまた彼の意図的な話の歪曲であろう。グレゴリーイがスメルジャコフの料理修行にあたり、誰かに育ての子の出生について語ることがあったとしても、その語り口は粗暴で不器用でこそあれ、スメルジャコフを貶めるようなことなど決してないことは、スメルジャコフ自身が一番よく承知していたはずなのだ。ここに我々が読むべきは、グレゴリーイとスメルジャコフとの間に存在した憎悪や怨念などではなく、むしろ複雑に屈折した愛憎の心理劇であろう。

グレゴリーイとスメルジャコフ

次回第2章で見るように、密かに猫を殺しては葬式遊びをするような子供となり、次第しだいに暗く歪な心を現わし出してゆくスメルジャコフに心を痛めるグレゴリーイは、この子に文字を教え、更には旧約聖書を用いての教育さえ始める。グレゴリーイから始まるカラマーゾフ家の「寺子屋教育」である(第2章^[5]、第3章^[3])。スメルジャコフを「叱る」グレゴリーイがいるとすれば、それはこの教育の延長線上にある叱責であり、ここにはル

カの聖句を踏まえ、スメルジャコフに対して、神から「聖なる者」たるべく命じられた「初子」としての自覚と矜持を持つことを迫るグレゴリーがいると考えるのが自然であろう。

一日の内に立て続けに体験させられた二人の赤ん坊の死と生。耐え難い、また信じ難い生の悲劇、「自然界の混乱」に直面させられたグレゴリーは、筆者によればこの時以来、「神さまのこと」を学ぶようになったという。彼が手に取ったのは『殉教者列伝』や旧約の『ヨブ記』、そして『シリアの聖イサクの苦行説教集』などの書物であった。筆者はグレゴリーが、中でも聖イサクの説教集を何年にもわたり根気よく読み続けていたと記す。聖イサクの教えの核心とは、人間が犯す如何なる大罪も神の愛を凌ぐことは出来ないという、神の絶対愛の提示であるが（第6章⁵）、グレゴリーにはその内容を何一つとして理解出来なかったという。だが、と筆者は記す、だからこそグレゴリーはこの書物を最も大切なものとし、愛読もしたのだと。グレゴリーは既にそこに記された神の真実を知り、確信もしていたのだ。

「孤児というものは神さまの子だ」「育ててやるんだ。これからは泣くな」。他ならぬ神からさえ言語道断の試練に投げ入れられること。それがこの地上における人間の生であり、その「自然界の混乱」、言語道断の絶望の底でも悪魔に心を委ねず、神と人間への愛を貫き通すこと、そこに初めて真実も現れ出るというヨブ記が説き、また聖イサクが繰り返し説く逆説をグレゴリーは黙って生きていたのである。ゾシマ長老がアリョーシャと共に未来を託したのも、このグレゴリー夫妻やマリアのような「親切な人たち」、信仰の究極の逆説を自然に巧まず生きるロシア民衆の聖性と「実行的な愛」に他ならない(六3E)。再度記しておこう。マルファと共に自分を育ててくれたグレゴリーの粗暴さと不器用さと無教養の内に、また自分に聖パウロから採ったパーヴェルという洗礼名を与えた育ての親の内に、スメルジャコフが自分に向けられた愛を感じ取っていなかったと考えるならば、それはスメルジャコフを、そしてグレゴリーを大きく誤解したことになるのだ。

「ちびっこ」で、「知恵遅れ」で、「臭い女」とも呼ばれ、町を徘徊する乞食女がある晩、名だたる好色漢で破廉恥漢のフォードルによって弄ばれ、この世に産み落とされた「初子」。成長と共に、世間の噂からも明らかになってゆく自らの出生の秘密。言語道断の残酷で醜悪な運命を決して赦さないスメルジャコフは、育ての親グレゴリーが自分に愛情を注ぐ存在であることを知れば知るほど、また無教養で愚直で不器用な彼の言葉が表面的な粗暴さの裏に深い愛を隠し持つものであることを理解すればするほど、それを正面から受け入れることを頑なに拒み、彼の言葉を悪意に満ちた醜悪なものに意図的に捻じ曲げ、嘲笑的な態度を以って応えたといえたい。つまりこの育ての親に対するスメルジャコフの執拗で頑なな反抗的姿勢とは、むしろ彼の愛情の歪んだ逆説的表出だと取ることも可能なのだ。

そうだとするならば、我々の前には「出生に対して叛旗を翻す」青年スメルジャコフの複雑に屈折した心理、つまり自らの出生と運命に対する憎悪と復讐心と、それと裏返しにある育ての親の愛情の感受と、それに対する愛情の歪んだ表出という、複雑この上ない心

理ドラマが浮かび上がってくることになるであろう。成長するに従ってスメルジャコフが示し始めた極度の潔癖さ。スープに限らず、口に運ぶもの全てをフォークで突き刺し、顕微鏡を覗き込むかのようにじっと見つめるこの青年の姿も、ここから見れば単なる精神的異常さの兆候として片づけるべきものではなく、また悪魔的天性の露呈だとしてただ恐れ忌むべきものでもなく、この地上にありとあらゆるもの一切の清澄透明を疑い、自らその真偽を試みようとする若者の、悲劇的心理の表出として取るべきであろう。

繰り返しとなるが強調しておこう。長い裳裾のついた一張羅の青いドレスを身に纏うマリアとの逢瀬に、鋏で縮らせた髪をポマードで塗り固め、エナメルエナメルの牛革の短靴を履いて現れたスメルジャコフの姿から、ただ単にモスクワ帰りの田舎下男の気取りのみを見て、また育ての親への激しい呪詛から、不条理で醜悪な運命への復讐心に固まった性格異常のみを認め、その干乾びた悪魔的な心を思い描くとしたら、我々はこの存在の心の奥に蠢く自らの出自への怒りと悲しみ、そしてまた彼の内に息づく愛への希求と葛藤を見過ごし、また地上のありとあらゆるもの一切の真実、そしてその可否を問う思索家、悲劇的「観照者」(第2章)の姿を見過ごし、自らの心の貧困と偏狭さとを証するだけであろう。

「母の胎」を「開く」か「切り裂く」か、和訳の問題

グレゴリーが引いたルカ福音書の「母の胎を開く」という表現であるが、この日本語訳について疑問を提示しておきたい。

先に見たように「母の胎を開く」とは、本来ユダヤの民にとり、夫婦に与えられた神の「初子」への祝福を示す表現である。これを『カラマーズフの兄弟』の日本語訳の多くは「切り裂く」と訳出している。「開く」というギリシヤ語($\delta\iota\alpha\upsilon\omicron\iota\gamma\omega$)に対応するロシア語(разверзать 不完了体、完了体は разверзнуть)が、「広く開く、開ける、割る」から「切り裂く」という意味も持ち得るため、これを前面に押し出した訳語と思われる。スメルジャコフの誕生が「母の胎を切り裂く」蝮の子の誕生と重ねられ、この青年の悪魔性を表現する上で格好の訳語と考えられたのであろう。あるいはどこかに確かな出典があるのだろうか。

だがいずれにせよこの訳語は、上の本文で示したように、グレゴリーをもスメルジャコフをも、ただ怒りや絶望や怨念に固まった否定的なイメージで捉えるという、致命的な誤解に繋がる危険性がある。つまりこの「切り裂く」という訳語では、スメルジャコフの悪魔性をひたすら強調するグレゴリー像が打ち出され、育ての子を悪罵するだけの無教養で頑固で粗暴な下男という否定的なイメージのみが彼に付与されてしまうであろう。そして彼がスメルジャコフを神から恵まれた「初子」として受け止めて祝福する心、妻と共に彼に向け続ける強く深い愛情が、遠く後退させられてしまうことになるであろう。つまりグレゴリーにとりスメルジャコフの誕生とは、「母の胎

を切り裂く」蝮の子の誕生のように、ただ悲劇的かつ悪魔的な忌まわしい出来事、彼自身の言葉で言えば「自然界の混乱」以外の何物でもなかったことになってしまうのだ。

本文でも記したように、グレゴリーが障害を持って生まれ、間もなく死んだ自らの赤ん坊の葬儀を済ませた正にその日の夜、庭の風呂場で乞食女スメルジャシチャヤが自らの命と引き換えに産み落としたスメルジャコフを、神と亡くなった赤ん坊とから送られた子として、妻のマルファと共に受け容れる『カラマーゾフの兄弟』の中でも最も感動的で重大な場面の一つは、否定的な色一色に染め上げられてしまうであろう。ドストエフスキイが描く人物たちの言動の背後に展開する超越的聖書的磁場での思索とドラマ、その聖と俗の「二重構造」、そしてまたその否定性と肯定性の両極性に常に目を向けることの必要が改めて浮かび上がる。

5. スメルジャコフと聖書(2) —イエスへの呪詛—

イエスへの叛旗、そして「神と生命への呪い」

次に検討すべきは、スメルジャコフの悲劇性と悪魔性。彼がマリアに向かって発した、もう一つの衝撃的な言葉である。

「この世にまるっきり生まれて来ないで済むのだったら、私はまだ胎内にいるうちに自殺してしまいたかったです」(五二)

母の胎内にいる間の自殺。この世に生を受けた人間が発する言葉として、これ以上痛ましいものが他にどれだけあろうか。『カラマーゾフの兄弟』全篇の中でも、恐らくは最も悲劇的で悪魔的な衝撃的言辞の一つと言うべきであろう。スメルジャコフの心に潜む測り知れぬ痛みと悲しみと孤独、そして怒りと怨念がここに明らかとなる。

自らの出生への痛みと悲しみ、そして自らが投げ込まれた運命の不条理と醜悪への怒りと怨念。ソフォクレスが描いたオイディプス王の苦悩から、シェイクスピア劇におけるアテネのタイモンやハムレットやリアの呻き、またアルツィバーシェフの主人公たちが発する痛烈な生への呪い等々——スメルジャコフが発した呪詛の叫びと同類の言葉を古今東西の文学の内に求めれば、恐らく膨大なアンソロジーの編纂が可能となるであろう。だが我々は、今は飽く迄も聖書的磁場の内に留まり、スメルジャコフの言葉の検討を続けよう。これからも見てゆくように、スメルジャコフが内に蓄える旧約新約の聖書知識は並大抵のものではない。彼の思索はこの聖書的磁場の内で展開していると見るのが自然であろう。マリアに向かって彼が発した自らの生への呪詛の叫びも、まず我々に思い起こさせるのは、旧約におけるヨブの叫びである。

「何^{なに}とて我^{われ}は胎^{はら}より死^{しに}て出^{いで}ざりしや。
何^{なに}とて胎^{はら}より出^{いで}し時^{とき}に氣息^{いき}たゑざりしや」(ヨブ記三 11)

スメルジャコフの呪詛は、正にこのヨブの叫び、故なき苦しみの底から発せられた悲痛極まりない呻きと重ねられよう。だが我々が視野を更に新約世界にまで広げる時、そこに浮かび上がるのは、十字架を目前に控えたイエスが発した言葉であろう。マルコ福音書によれば、「最後の晩餐」の席で、自分を売り渡したユダに対して、また間もなく自分を棄てて逃げ去ってゆく弟子たちを前にして、イエスは次のように語ったとされるのだ。

「然^されど人^{ひと}の子^こを売^うる者^{もの}は禍害^{わざはひ}なるかな、その人^{ひと}は生^うま^うま^{かた}ざりし方^{かた}よかりしものを」
(マルコ十四 21)

自らの運命に対するスメルジャコフの呪いの言葉とは、恐らく新約旧約の極に位置するこれら二つの言葉と突き合わせることで、その意味の奥行きと重みを具体的に浮かび上がらせると言えよう。だが我々はこれら二つの言葉と、スメルジャコフの言葉との対応をただ指摘してみても、彼の言葉が持つ恐ろしさを真に明らかにしたことはないであろう。忘れてならないことは、この時スメルジャコフが呪いの言葉を「何ものか」に向かって発していたという事実である。先に見たように、それはまずグレゴリーイに対して、祖国ロシアとロシア農民に対して、外国人に対して、そして兄弟たちに対して向けられた呪詛だったのだ。続いてその先、彼の呪詛は何処に向かったのか。ヨブであったのか、イエスであったのか。あるいは両者に向かってであったのか。このことを具体的に明らかにしない限り、我々の作業はただスメルジャコフの言葉の出典探しで終わるのである。

スメルジャコフが向き合っていたのがヨブであった場合、彼はヨブと対決したのではなく、運命から与えられた苦しみに対する嘆きと呪いの言葉を、ヨブと共に、ヨブと和して、神に向かって発していたことになるであろう。これはこれで十分にあり得ることだ。だがこれに対し、もしスメルジャコフがイエスを念頭に置いていたとするならば、彼は自らの運命への呪詛をイエスに対して、更にはイエスの背後にいる神に対して発していたことになるであろう。この場合、イエスとスメルジャコフとの間には、「最後の晩餐」の席でイエスが語った言葉を巡り、時空を超えた激しい応酬が交わされたことになる。これから我々が見てゆくスメルジャコフの思想と行動の激しい対決的性格と、その悲劇性と悪魔性とを念頭に置く時、彼が正面から向き合っていたのは、やはりイエスとその言葉であったと考えるべきであろう。

このことを具体的に理解するために、マルコ福音書の中でイエスの言葉が発せられた文脈の確認をしておこう（「研究会便り（6）」[\[3\]](#)においても同じ分析がなされている）。

—— エルサレム入城（十一 1-11）の後、イエスと敵対勢力との間には急速に緊張が高まってゆく。過越祭と除酵祭が迫り、イエス殺害計画を立てられる中（十四 1-2）、祭司長たちの前に一人の弟子が現れ、師イエスの「引き渡し」を申し出る。ユダである（同 10）。動機は定かでない。祭司長たちは喜び、ユダに銀貨の付与が約束される。その後のユダについてマルコは、彼が「如何にしてか機好くイエスを付さんと謀る」（同 11）と記す。そして「最後の晩餐」。イエスは告げる。「まことに汝らに告ぐ。我と共に食する汝らの中の一人、われを売らん」（同 11）。文脈からその「一人」がユダであることは明らかだ。だがマルコによれば、「弟子たち憂ひて一人一人《われなるか》と言ひ出でし」（同 19）。マルコにとり、師イエスを売り渡すのはユダ一人でない。誰もがその可能性の中にいるのだ。この弟子たちに向かい、続いてイエスが發する言葉は悲痛この上ない。「然れど人の子を売る者は禍害なるかな、その人は生まれざりし方よかりしものを」（同 21）。

スメルジャコフが念頭に置いていたのは、正にこのイエスの言葉だったのでなかろうか。改めて二人の言葉を、今度は両者共に口語訳で、並べてみよう。

「しかし禍だ、人の子を売り渡すその人は。その者にとっては、生まれて来なかった方がましだったろうに」（マルコ十四 21,岩波書店新約聖書翻訳委員会、佐藤訳）
 「この世にまるっきり生まれて来ないで済むのだったら、私はまだ胎内にいるうち、に自殺してしまいたかったです」（『カラマーズフの兄弟』五 2,芦川訳）

この地上に人間が生まれることの意味を問う、千九百年近くの隔絶を挟んだ、恐るべき対話と言うべきか、否、対決・応酬と言うべきであろう。ここには遠く旧約聖書のヨブの叫びを踏まえ、新約聖書のイエスの言葉を正面に据え、このイエスと神に対して、自らの生の意味について究極の否定的返答を投げ返すスメルジャコフがいると言えよう。

イエスの言葉の二重性

イエスとスメルジャコフの言葉。ここに二人の時空を超えた対話・対決、あるいは応酬を読もうとする時、まず我々はイエスの言葉が持つ意味を「否定」と「肯定」、二つの方向で受け止めて考える必要があるだろう。マルコ福音書が伝えるイエスの言葉は、両方向に取り得るのだ。それら二つの意味に応じて、スメルジャコフの応答も二つの相異なった方向で捉え得るであろう。

まず「否定」の方向で取るとどうなるか。イエスの言葉は、ユダを始め次々と自分を裏切る人間たちへの、文字通りの激しい呪詛と弾劾の言葉、悲痛な叫びとさえなるであろう。この場合スメルジャコフの言葉は、イエスの呪詛と弾劾を文字通り正面から受け止め、逆にイエスと神に対して痛烈な呪詛と弾劾を投げ返すものとなり、その先には一人自死の道

を選び取るスメルジャコフの姿さえ浮かび上がるであろう。イエスの側からの人間への呪詛。それを受けたスメルジャコフの側からの呪詛の投げ返しと、自らの生の否定。ここにあるのは福音書と『カラマーゾフの兄弟』が内包する否定性が極限まで押し詰められた「神と生命への呪い」(六三I)の応酬であり、そこを支配するのは悪魔性と悲劇性で塗りつぶされた闇一色の世界、そしてそこから浮かび上がるのはスメルジャコフの悪魔的相貌である。スメルジャコフがこのような徹底的否定の方向でイエスと神と対峙していたこと、彼がこのような悪魔性を秘める存在であることは、決して否定出来ない。

逆にイエスの言葉は、「肯定」の方向でも受け取り得るであろう。つまりそれは弾劾と呪詛の言葉であるどころか、逆に、自分を裏切る人間たちに向けられた痛切な愛と憐みの心、つまり人間への絶対愛から発せられたこの上なく激しい悲しみ・愛惜の表明とも取り得るのだ。事実福音書記者マルコが記すのは、神を愛として捉え、あるいは神の愛に捕らえられ、その愛を十字架上の死に至るまで貫いたイエスの激しい生の姿である。マルコは絶命したイエスを前に、ローマの百卒長に言わせる。「^げ実にこの人は神の^{ひと}子なりき^{かみ}」(マルコ十五39)。この場合スメルジャコフの応答とは、自らを含む人間に向けられた「キリストの愛」に気づかずして、否、むしろ敢えてその愛を無視したまま、「神の子」イエスと「神」に投げ返された痛烈な生への呪詛と弾劾ということになるであろう。つまり運命への復讐を「父親殺し」によって成し遂げようと謀るスメルジャコフとは、自らが産み落とされたこの地上世界における肯定的価値の一切を正面から拒否し、自らに向けられた「キリストの愛」をも斥け、「人の子を売り渡す」ことを選んだ「叛逆」の「ユダ」スメルジャコフとも言い得るのだ。事実ここで彼が発した自らの生への呪詛の叫びとは、福音書のイエスに対して吐きかけられた唾、神に向かって翻された叛旗と考えることで初めて、そこに含まれる悲しみと怨念は最も明瞭に激しく、その悲劇性と悪魔性とを浮かび上がらせるように思われる。最終回の第6章で見るように、アリョーシャは自らが編纂した小冊子「ゾシマ伝」において、師ゾシマの言葉を用い、このスメルジャコフの心を「神と生命への呪い」と表現するであろう(六三I)。このこともここで記憶に留めておこう。

そして我々が本論の最後に確認するのも(第6章⁵)、マリアやグレゴリーやマルファやアリョーシャたち、自らを取り巻く「親切な人々」から注がれる愛に気づかずして、否、むしろ彼らの愛を正面から受け止めず、更には「神の愛」と「キリストの愛」とも向き合いながら、最終的にはそれさえ斥けるスメルジャコフである。彼は自らの生をひたすら「神と生命への呪い」、運命への復讐に凝集させ、「父親殺し」を果たすや、「悪業への懲罰」(ゾシマ長老、二五)に曝され、遂には自己処罰と自己清算の死を遂げるであろう。マリアが夜の家畜追込町を駆け抜けてアリョーシャに知らせようとしたのは、このスメルジャコフの死についてである。

結論を急ぐことは止めよう。スメルジャコフの念頭にあったのが、人間たちへの呪詛と弾劾を投げつけるイエス像であったのか、逆に人間にさえ愛と憐みを注ぐイエス像であったのか、我々はその両者を念頭に置き、第6回目の最終章まで、この作品が内包する様々

な「肯定と否定」の諸相の前に立ち、そこにある問題の検討を続けることにしよう。その過程を経て初めて「懼るべき」「活ける神」の前に立たされたスメルジャコフ、「怒りと裁きの神」と「愛と赦しの神」という極性の間で苦しむ彼の姿も正確に浮かび上がってくるであろう（第6章⁵）。その上での最終的な判断に向けたデータを積むためにも、本章では最後にマリアとスメルジャコフの逢瀬の結末を確認しておこう。

アリョーシャの「くしゃみ」

スメルジャコフがギターを爪弾きながら最後の一節を唄い出した時である。思いもかけなかったことが起こる。突然アリョーシャが「くしゃみ」をしてしまうのだ。恋人たちの密かな会話を、「天使」とも言われる青年が立ち聞きしていたことが露呈する。だがここで我々が心に留めるべきは、天使アリョーシャの「くしゃみ」の滑稽さでも、恋人二人の前に進み出ることを余儀なくされた彼のバツの悪さでもない。重要なことは、スメルジャコフが自分の運命についてマリアに語った一切を、作者ドストエフスキイがアリョーシャの耳に入れさせたということ、しかもそのことを当の二人に「くしゃみ」によって知らせてしまったという事実である。

異母兄弟スメルジャコフの心の闇を知ったアリョーシャの中で、また彼に対するマリアの愛を知ったアリョーシャの中で、その後如何なることが展開してゆくのか、更にまた彼ら三人の間では今後如何なる交流が開始されることになるのか、これらについて筆者が直接記すことはほとんどない。だが我々はもう一度、本章の冒頭で取り上げた場面を思い起こそう。スメルジャコフ自殺を知ったマリアが、警察にも「誰にも知らせず」、「真っすぐ」「真っ先に」駆け付けたのは他の誰でもない、アリョーシャの許だったのである。この事実はいくら注意してもし過ぎることはないだろう。

作者ドストエフスキイが直接書かずして、我々読者に読み取ることを迫ったドラマは、この作品中に少なくない。またそのヒントも多くはないが、皆無でもない。それらの解明を通してスメルジャコフについて、殊にマリアとアリョーシャとの関係で、そしてまたイワンやドミートリイとの関係でも考えること、つまりこの作品のブラック・ホールたる存在が投げ込まれた運命と、その中で彼が育んだ思想と行動の意味を様々な角度から考えること、これが第2章以降の我々の課題である。

(第1章 了)

2017年12月

2018年12月一部加筆修正

次回、第2章、研究会便り(9)について

次回の第2章、研究会便り(9)は、マリアが愛するスメルジャコフについて、その誕生から少年時代を経て青年時代にまで至るエピソードの全体を出来るだけ丁寧に検討し、作者ドストエフスキイがこの青年を、如何なる構図の下に、また如何なるベクトルを以って描こうとしているのか、検討したいと思います。

その過程で登場するのがイワンであり、これら「異母兄弟」かつ「若旦那と下男」である二人が、如何に出会い、そして交流から離反へ、遂には対決に至るかを追います。

スメルジャコフとイワン。彼らは「神と不死」を求め「ロシアの小僧っ子」として、人間と世界と歴史について、そして神とイエスについて、「闇と光」「否定と肯定」の両極の方向に、驚くほど深く突き詰めた思索を展開してゆきます。イワンの「地質学的変動」の人神思想を介し、深く結ばれた二人は、「父親殺し」に向けて、それぞれが悲劇的悪魔的ドラマを展開してゆきます。今回はこれら二人の交流を、スメルジャコフを中心に追い、その思想と行動の解明を目指します。